

倫理的意思決定のための 「知的ツール」

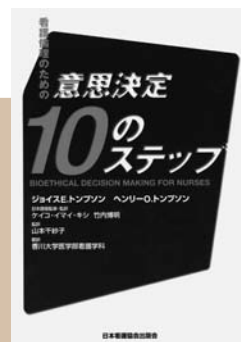
[評者] 青山ヒフミ 大阪府立看護大学看護学部看護学科教授

看護倫理のための 意思決定 10 のステップ

ジョイス E. トンプソン ヘンリー O. トンプソン 著
ケイコ・イマイ・キシ 竹内博明 日本語監修版・監訳

B5 判, 304 ページ

定価 3150 円 (本体 3000 円 + 税 5%)
日本看護協会出版会 TEL. 03-5275-2471



看護倫理とつきあいはじめてもう十数年になる。当時、教育担当婦長として勤務していた病院で、倫理委員に任命されたことがきっかけだ。その病院はホスピスの草分け的存在であると同時に、新生児医療についても 1960 年代からペリネータルセンターを立ち上げ、先駆的に取り組んでいた。そのため、院内では生命の始期と終期についての倫理的問題が数多く生じ、医療者間で時に対立しながらも公式、非公式にしばしば話し合いがなされていた。

■倫理的問題への自問自答

そのようななかで、あるとき倫理委員会に 1 つの検討事項が主治医より提出された。出生時仮死状態で生まれ、人工呼吸器を装着し、意識が回復しないまま 10 年近くが経過した A 君のことだ。

臥床状態での発育は A 君の気道を変形させ、気管チューブが何らかの原因で外れれば、再挿入は非常に困難な状態へとになっていた。もし、A 君の意識があったなら、耐えられないくらいのつらい処置となる。主治医はこの処置を長い年月繰り返しながら、これは A 君にとって良いことなのだろうか、A 君の人としての尊厳はどこにあるのだろうか、自分の行なっていることにだんだんと疑問をもつようになり、倫理委員会にこの問題を投げかけた。この問いかけは倫理委員全員に非常に重く受け止められた。委員は戸惑いながら、家族や実際にケアをしているスタッフ全員をまきこんで、時間をかけて話し合い、コンセンサスを形成していった。

そのときからだいぶ時間が経過したが、私は今も折にふれこれで良かったのか自問自答している。状況は違っても多くの看護管理者は同様の問いかけ、疑問を心の中に抱えていることだろう。

■意思決定のトレーニングのために

本書は、看護倫理に関心のある人にはすでによく知られている、J.E. トンプソン博士と H.O. トンプソン博士の「意思決定のための 10 ステップモデル」について著したものである。本書の目的は、看護師をはじめヒューマンケアを専門とする、すなわち職業上倫理的ジレンマに陥りやすい人々に、倫理的意思決定を行なうための実践モデルを紹介するものであり、II 部構成となっている。第 I 部では生命倫理の理論的基礎について書かれており、第 II 部では意思決定モデルに関する入門的な諸章で、10 のステップの段階毎に事例に基づいた考え方が紹介されている。また、巻末にはいくつかの参考事例が載っており、読者が自分で倫理的意思決定のトレーニングができるようになっている。

医療が高度化、複雑化するなかで看護管理者の倫理的意思決定を問われる状況がますます増えている。看護倫理に関する問題は正解というものがあるわけではなく、意思決定のプロセスをいかに手順を踏んで考えていくことが良い倫理的意思決定につながると考えている。本書はそのトレーニングをするための良い「知的ツール」となってくれるであろう。翻訳の労を執られた訳者の諸氏に感謝したい。